



認定特定非営利活動法人
日本ボランティアコーディネーター協会
代表理事 筒井のり子氏

初めに開会式でJVC A代表の筒井のり子氏は「コーディネーター研究集会を毎年開催させてはいますが、私たちは『市民の参加を支えるプロを目指して』をキヤッチフレーズで行っています。市民一人一人が当事者として社会福祉などに参加をし、異なる分野や異なる組織が協働できるように、

全国各地から三二二名の参加者があり、「さわやか」から高原、貞谷が初めて参加しました。
市民を支えるプロを

目指して

超・声・肥エル「ボランティアコーディネーション」
「カギは『越境』と『わくわく感』」
二月二十八日(土)・三月一日(日)に大阪府大阪市の大阪マーチャントアイズ・マート(OMM)で認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会(以下JVCA)主催の「全国ボランティアコーディネーター研究集会二〇一五大阪」が開催されました。紙面上の都合により一部を掲載いたします。

全国ボランティアコーディネーター研究集会二〇一五開催

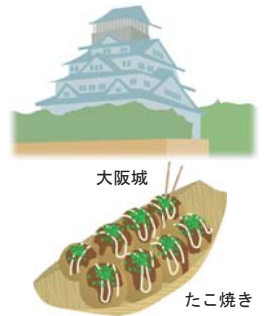
より幅広い方々にボランティアコーディネーター力をつけて頂きたいと思えます」と挨拶されました。

昇氏は「今回のテーマでもある『こえる』が大切です。今日から『超えよう』、地域を『越えよう』、その時にしんどい事があるけど、声を出して力を出し、太い社会・地域社会にしていこうという事です。

今日から二日間、楽しい集会にしていこうと思っております」と話されました。

その後、『超・声・肥エル「ボランティアコーディネーション」』

全国ボランティアコーディネーター研究集会とは
全国ボランティアコーディネーター研究集会は、一九九四年に第一回が開催され今年で二十一回目になります。毎年、二月下旬か三月上旬に開催しており、開催期間は二日間です。毎年、開催都道府県が異なります。



大阪城

たこ焼き

「越境」と「わくわく感」と題して、オープニングセッションに入りました。コーディネーターにJVC A理事の永井美佳氏、登壇者にJVC A理事の井岡仁志氏とstudio・L代表の山崎亮氏の話がありました。

最初に、永井氏が「地域の課題や社会の課題は深刻で、楽観視できません。地域の困りごとや社会の困りごと、コミュニティの困りごと、行政任せだけではなく、自分の事として向き合い、取り組んでいく事

が求められていますので、お二人に取り組まれていることをお話ししていただきます」と話がありました。

多くの関係機関や行政と連携を取ることが重要

連携を取ることが重要

井岡氏は「滋賀県高島市では、三、四年前から見守りネットワークに取り組んでいます。

見守りネットワークの重要な事として『住民のつながりと自発性・参加の促進』、『多様な主体のネットワークと協働関係の援助』ではないかと思えます。

また関係団体や企業が連携をしていくことも大事です。見守りとは、高齢者見守りや子供見守り、認知症・徘徊対策見守りや孤独死対策見守りなどたくさんありますが、見守りは住民だけで頑張るのではなく、多くの関係機関や行政などと連携を取りながら、多様な人との関わりが非常に重要になってくると思います。

多くの人が関わりながら、人が人を支えていくために私たちのような社会福祉協議会はないものを生み出していく開発力が問われていると思います」と話されました。

住民が、提案実行型の

発言に変わってきた

次に山崎氏は「島根県海士町は人口三三〇〇人います。町長より自治会の一〇年計画を造りたいと連絡があり、住民の皆さんに呼びかけたら、八〇人の人が参加してくれました。

その後、全体の計画のタイトルは『島の幸福論』に決まりました。

住民が、行政への要望陳情だけではなく、提案実行型の発言に変わってきました。住民側が作成した一〇年計画書には三つのテーマがあります。

① 一人で出来る事

一人で出来ることは今日からやろう。

② 一〇人で出来る事

一〇人で出来ることは各チームを作つてやろう。

③ 一〇〇人・一〇〇〇人で出来る事

一〇〇人・一〇〇〇人で出来ることは行政などを巻き込んでやろう。という考え方で

最後にコミュニケーションデザインとは皆さんと話し合って、皆さんで決めて、皆さんで実行していく事だと思えます」と話され、正午にオープニングセッションは終了しました。(裏面につづく)

分科会

～病院&福祉施設のコーディネーションを考えよう～

ボランティアがたくさん集まる魅力ある組織とは？

午後一時三〇分から分科会に入りました。分科会は十六の分科会があり、その中の『ボランティアがたくさん集まる魅力のある組織とは？』病院&福祉施設のコーディネーションを考える』に参加しました。

ファシリテーターに学習院大学の長沼豊教授、事例発表者に聖路加国際病院の竹内和泉ボランティアコーディネーターと高齢者福祉施設「本能」の森賢一介護部長に事例発表をして頂きました。

初めに長沼氏は「ボランティアさんがどのように集まり、より活躍していただけるのかを語り合いたいと思います」と話され、五班に分かれてグループ協議を行い、事例発表についての感想や、自己紹介、自分たちの活動について話し合いました。

組織にどのような

魅力が生まれるのか

ボランティアがたくさん集まる組織にするには視点が二通りに分かれています。一つは、どのようにボランティアを集めたり、ホームページや広報誌など、情

報をこまめに発信して周りに周知してもらう。

もう一つは入ってきた人が充実した活動を行うか。という視点です。そのような視点で見た時に、組織にどのような魅力がうまれていくのかだと思います。

人間が行うボランティアには感情があります。

だから活動して良かったと思わせることが大切です。活動が長続きするのは、好きなことに関わっているから満足感を得ます。そして喜びがあるからこそ、連帯感が生まれて、達成感

どこもかしこも「コーディネーター」流行り！

～ボランティアコーディネーターの立ち位置は？～

二日間のまとめとして全体会が行われました。

JVCAの早瀬昇理事は「初めにコーディネーターの様々な役割についてお話をさせていただきました」と話され、JVCAの筒井

のり子代表理事は「最近、コーディネーターという言葉が聞かれるようになりまして、それに並行して、ボランティアという言葉も聞くよう

が芽生えます。

また、感謝されるから有用感が得られます。

感情的になるという事は下手をすれば、感情が崩れて、やめようかなという気持ちになります。

続いて集団（組織）ゆえの楽しさ・難しさです。一番は活動のマンネリ化です。長期同じメンバーで活動していると高齢化してきます。いかに新しい風を入れるかだと思います。

そのため魅力ある組織にするためには、リーダーシップが大切だと話され、分科会は終了しました。



になってきました。

そこで、ボランティアコーディネーターとはどのようなものを勉強していきたいと思っています。

一九七〇年後半に登場し、一九八〇年代に主に社会福祉分野での配置が進みました。

一般的に広まってきたのは、一九九五年の阪神・淡路大震災、二〇〇〇年以降、多様な分野や組織へ広がりました。

市民が社会づくりに参加

できることを可能にする力

ボランティアコーディネーター力とはボランティア活動を理解して、新たな力を生み出せるように調整する事で、市民が社会づくりに参加する事を可能にする力です。これを整理すると大きく三つに分かれます。

一つ目は人の参加の意欲を高めることです。

二つ目は人々が共に課題解決に取り組む事を支えることで、対等な関係を作り出す事、新たな総合力や解決力を生み出す事です。

三つ目に活動を通し気づいた問題を共に伝え広げる事です。

これをもとに一日一日を大切に活動してほしいと思います」と話されました。

次に東京外国語大学の杉澤経子氏とJVCA理事の



全体会の様子

長谷部治氏の二人にパネリストとして話していただきました。長谷部氏は「コーディネーターは一対一で何かをするのではなくて、色々なボランティアがしたい人たちを巻き込んで、様々な活動や地域の活動を解決するという事です」と話されました。

また、杉澤氏は「ボランティアが様々な分野に関わっていく事が必要な事だと思っています。

多様化に対応していくには、いろいろな分野の人たちに関わりながら、繋がって、知恵を出し合い、学びあいながら、その問題に対応していく事が大切だと思っています」と話されました。

まとめとして、早瀬実行委員長は「この二日間の研修内容を各自持ち帰り、今後の活動に役立ててほしいと思います」と話され、全体会は終了しました。

最後に早瀬実行委員長より、二日間の参加の御礼の挨拶がありました。

また、来年は三月五日・六日で開催される神奈川県の実行委員会の方から挨拶があり、研究会は午後三時三十分を終了しました。